小諸石垣会にて早天祈祷会
「常燃の火」たる実存
――ヘブル書13章8節――

（「石垣会だより」第68号、１９７４年９月発行）

１９７４年８月４日
小池辰雄

永遠不変な実存　聖霊は常燃の霊火　み霊の同一性

【ヘブル13】

8イエス・キリストは昨日も今日も永遠までも変り給うことなし

●永遠不変な実存

皆さんの実存を拝見して私は何も言うことはありません。ヘブル書13章8節に、

「イエス・キリストは昨日も今日もいつまでも変わることがない」

とあります。今朝はただこの一句だけで、早天祈祷会を導かれたい。この不動不変ということですね。私たち日本人は春夏秋冬と非常に気候が移りゆく、それは非常に或る意味では有難いことです。

ギリシヤの哲学者ヘラクレイトスが、

「パンタ・レイ」「一切は流転する」

といって、一切は流れているという。一面、変わってゆくということは現象界の確かな現象です。ところが「赤壁（せきへき）の賦（ふ）」の中にもありますが、

「月を見て、月は満ちまた欠けていく。けれども満ちたり欠けたりしているこの月が実は変わらないのだ」

と、そういう意味のことを詠ってあります。ところで我々日本人、気候風土の影響もあって、とかく移り変わりやすい面があるようです。流行を追うような性質があります。このことは三谷先生〔三谷隆正 1889～1944〕も嘆いておられました。

深い不動の世界がなかなかつかめない。こういった移りゆく中で、移らざるもの、変わらざるもの、これを本当に体験していく、つかまえていくということが日本人には大事なことだと思います。では、現象界をいくらそのようにして探って、変わらざるものを得ようとしても、これはなかなか難しい。

哲学の世界にこれを求めても、思想がいろいろと移りゆきます。けれども聖書の世界は、啓示の面は創世記から黙示録まで、いろいろの展開はありますけれども、しかし、その奥

に不動不変なるものが貫いています。

「我はアブラハムより先に在りしなり」

といったキリストは永遠の方、永遠不変な実存であられる。イエス・キリストのなさったことは、多種多様です。キリストの例えば「愛」ということを見ましても、これも愛の現象面はさまざまなんです。けれどもキリストの愛のそのものは不変である。その義そのものは不変である。こういった不変なるものを本当に身につけないと、私たちの信仰などは当てにならない。けれども私は皆さんを拝見していて、不動なるものが貫いているということを見て、むしろ尊敬しているわけです。その一つのことは、例えば朝ごとに祈祷会をなさるといったような在り方ですね。それは律法ではありませんけれども、止むにやまれずして貫いていくというキリストに対する信仰、この不変が貴いです。

キリストの、

「今日も明日も次の日も我は進みいくなり」

というような、この不動のキリスト。自在でありながら心は不動不変である。本当に不変不動なものこそ、それが生きているならば、また千変万化できるわけです。そういう意味においてイエス・キリストの不変不動なる実存とか本願とかを、どこまでもキリストを主体として受けとっていく限り不動であります。

●聖霊は常燃の霊火

いったいその不動なものの実体は何でしょう。それは聖霊であります。聖霊は常燃の霊火であります。どんなに嵐が吹いても雨が降っても、われらの中なる常燃の聖霊の火は消えません。常燃であるということは、全存在がキリストのみ名を呼び、キリストに向かっているということです。ちょうどそれは地球がいつも太陽の周りを回らされている。引っぱり回されている。磁石が常に北極を指さざるを得なくされているように、天極なるキリストが聖霊の火を我らの中に点じていてくださるわけです。

「キリストは霊である」

とパウロは言いました。また、イエスは、

「神は霊である」

と言われました。その最高の霊であるこのみ霊が私たちの中に十字架を通して突破してきて燃えたのですから、この火は私たちの人間の側のいわゆる信仰とか何とかいうことでなしに、これはもう説明の限りではありませんが、気がつくと燃えているというわけです。さきほど小林君も言われた絶対恩寵の角度です。私はじっと黙って目をつむって詩篇103篇を聴いていましたが、素晴らしい詩篇ですね。詩篇の中で最も福音的といってもよい詩篇です。そういったキリストの火が燃えていれば、また、私たちは燃えざるをえない。それでなければ生きているということがあり得ないということが、いよいよ本当になってきた

わけです。それがためにはやはり人間は弱いですから、こうして毎朝祈祷会をなさるとか、あるいは何か常恒的な在り方、聖書を毎朝毎晩必ず読むとか、愛の実践を日常生活でどんな小さなことでもしてゆくとかで、神様に鍛えられてゆくということは具体的に大事なことだと思います。

大切なことは祈りの境地にいつどこでも入るということです。

「主さま！」

の一念、これが秘訣であります。どこでも主さまを証し、恐れなく聖名を証することです。即ちキリストのみ名が私たちの中で常燃の聖霊のゆえに生きていると、

「我が中にあるものを汝に与う」

と、ペテロの如くキリストのみ名を唱えて人を助け得るわけです。

●み霊の同一性

「キリストは今日も明日も永遠に変わらざるなり」

は、

「永遠に同一なるものである」

というようなギリシヤ語ですけれども、この同一不変なるもの、これは聖霊のほかにない。人間の側の信仰とか何とかいっている宗派的な主義的なものから脱けきることができます。

「み霊は一つ」

とエペソ書にある通り、「一つ」ということは常に同一常燃であることと、一貫して不動であることです。どなたにおきましても、み霊があるなら本当に同一であるという一つです。この同一性というもの。私たちはみな考えも違うし、やり方も違うし、顔も違うし、みんな違う。けれどもキリストのみ霊がくると、みな一番深いところでは同一です。そういう意味でキリストのものだから本当の愛がそこに通じる。聖霊の愛は同一なんです。

そういう意味におきまして、石垣会の皆さんが、何が来ようと、この不変不動なるものを貫けるということの一つの現われとして、こういったような祈祷会を続けておられることを、私はむしろ皆さんに聖名のゆえに敬意を表します。それだから今度は、そういった同一性をもったものが、類型的になってはダメです。集会の皆さん一人ひとりが、それぞれの特色をもって、それが今度は、百花繚乱の大きな調和になるという意味においては、それぞれ特殊性をもって、自由自在に本当の霊的生命体たることを証してゆけるのです。

これはパウロがコリント前書12章でいっている通りに、人の体と同じように体の各部分が本当に有機体的な各部分としてはたらきます。それがエクレシヤです。この一つの集りの一人一人がそのようにそれぞれの役割と特質を本当に尊重しながら神を讃えていく。そこに神の栄光を見ていくということが非常に大事です。要するに、本当の自由はキリストのみ霊の同一性を頂いているところにある。この不変にして千変万化の在り方はまた本当

に自在である。これが生命体だ。どうぞ石垣会の方々が皆それぞれ天のエルサレムの多種の宝石のように、地上の宝石もかなわないような光を放って、一人ひとりが本当に神の栄光を現わす。同一なる聖霊があるところにそのような素晴らしさが出てくる。それでなかったならば、一人ひとりが神の栄光を現わす意義がないといってもいいと私は思います。

ですから、昨夜の集会で半田いとさん（全盲のひと）がいらっしゃって、久しぶりで私の話をきかれて、本当に喜んでくださったですが、彼女のお姿が輝いているので、私はそこに神の栄光を拝見しました。そのようなことで、人の価値というものは、いわゆる価値判断なんていうものとはおよそ違います。私たちの主にあるところの価値というのは、価値なんていうものと凡そ違うのです。主の栄光体のほか何ものでもありたくないわけです。どうぞ、そういう意味において大いに皆さんは自信をもってお進み頂きたい。そして、どうぞこの信州に是非とも常燃の火を次から次へと燃やして頂きたいです。